

「恵みとまことに生きる」

ヨハネ1章14-18節

今年の教会指針はご存じのように「神を愛する者となる」です。「神を愛する者となる」ためには「自らが神に愛されている者である」ということが分かっていないと難しいですね。そして神の愛を感じるには時間差があります。親の愛が自分が子供の時には何も分かっていなかったようにキリストの弟子たちもイエス・キリストと共に歩んだ時にはある程度分かっていたがはっきりと詳しくは分かっていませんでした。今日取り上げていますヨハネの福音書はヨハネが改めてイエス・キリストを通して示されている「神の愛」、神がどれほどまでに私たちを愛して下さっているのかを思い起こしながら記しています。もちろん記すときにも神が導き働いておられるわけですが、今日はヨハネのように私たちもみことばを読みながら神の愛に気づき、神を愛する者へと成長してゆきたいと願っています。

1. キリストに愛されている

14節の「ことばは人となった」という言葉。この「人」は元のことばでは「肉体」という意味です。1節に「ことばは神であった。」とありますように「ことば」つまり神は世の初めからおられ、この方は世にある全てのものを造られ、この方にいのちがあり、この方が人の光であった、とあります。そして、14節でこの神が今、人となられた、つまり肉体を取られたと語られています。神が肉体を受けること、これを神学の用語では「受肉」と言います。つまり聖書は、「イエス・キリストは神であり、かつ人である」ということを明言しています。神がかつた人間でもなければ、人間臭い神でもないのです。人間としては私たちと全く変わりなく肉体を持っておられ、すべて肉体が感じるものを感じておられましたが、神としては全てのことがおできになるのです。そしてイエス様は人間の肉体を取られただけでなく、「私たちの間に住まわれた」とあります。この「住まわれた」というのは私たちと同じ環境の中で過ごすということです。つまり、「同じ屋根の下で暮らして下さった」ということなのです。さらに言うならばクリスマスにおいて馬小屋で誕生して下さったわけですから、神は普通私たちが神聖さを感じるような場所ではなくて、人ごみにもまれ、矛盾と不条理を感じるようなところで下さるのです。

神が一方的に肉体を取って、私たちのところに来て下さった。そして私たちと同じ環境で過ごされるだけでなく、人が目を向けたがらない醜さの中で誕生して下さった。しかも何の見返りも求めず、自主的にして下さった。それらのことは人である限り、誰であろうとイエス様の愛の対象とされない人はいないということです。ヨハネはこの時点でイエス様がなされたことの原因は私たちを愛しているが故であると確信しています。つまり、私たちは神であるキリストに愛されているということです。

この福音書を書いた弟子のヨハネは自分のことをわざわざ「イエスが愛しておられた者(13:23)」と呼んでいます。これは少しまわりくどい表現ですが私が一番イエスに愛されていたということをアピールしているのです。良い子育ては子供が何人居ようと「私が一番、お母さんに愛されている」と子供が感じているものだと言ったことがあります。まさにそのような表現です。そしてイエスが私を特に愛して下さったと感じる者は当然、私は精一杯イエスを愛する者として歩みたいと思うものです。

2. 赦され続ける罪びと

神が私たちに向ける態度について、三つのご性質があります。第一番目は「公正」あるいは「正義」です。神はえこひいきされるお方ではありません。私たちが行なったことによって、それに値する裁きを行なわれる、ということです。人によって対応が異なっていると私たちはその人を信頼することは難しくなります。人に対して公正に裁かれるということは自分に対しても公正に裁かれるということです。神は私の罪に目をつぶったり、気にされないということはありません。

第二番目に「憐れみ」という性質があります。それは、「与えなければいけないが、あえて控える」態

度です。筋道から言って当然、私たちが裁きを受けなければいけないのに、神は私たちに憐れみ、それをあえて行なわれない。」というもの、あるいは猶予してくださっているということです。分かっているのに待っていてくださるということです。

そして最後第三番目に「恵み」があります。ヨハネは、ここ14節から17節までで、「恵み」という言葉を繰り返し使っています。恵みとは、「私たちが受けるに値しないものを、受けることができるようにしてくださる」神の働きです。私たちは、神から祝福を受ける資格はありません。けれども、それを豊かに与えてくださるのが神の恵みです。時々、神様は私に良いことをしてくださらない。祝福を何も与えて下さらないという言葉が聞かれます。しかし、思うのですが、そのような考え方の中に「私は神様の恵みを受けるのにふさわしい者」あるいは「受けて当然の者」という意識があるのではないかと思います。特に日本人は、一生懸命努力して、周りに迷惑かけないで、前もって準備して計画して、受けた恩は義理で返しますから、当然のことをしたら当然のものが返ってくるはずと考えます。自分はまじめに一生懸命やったから神様はそれに答えてくれるべきだと思うのです。はたして神様にはあなたを愛さなければならぬ義務や負い目があるのでしょうか？ つまり恵みとはあくまで私ではなく、神様の側で御心の中で与えてくださったことなのです。例えば自分は自分の意志で生きていると考えがちですが神が身体の前すべてが動くようにしてくださっている、つまり生かされているとも言えるわけです。すると私は生きているのではなく生かされているのだということになります。ですから本来、神の恵みを受けるのに自分はまったくふさわしくないという意識があれば神がどれほどの恵みを注いでくださるか気づかされるのではないのでしょうか。続けて、16節の「恵みの上にさらに恵み」に注目したいと思います。特に既にイエス様を信じた人は注意したいと思います。一度、恵みを受けてそれで終わりではないのです。波が何度も何度も岸に打ち寄せるように、恵みが注がれる生活がクリスチャンの特徴です。「恵みによって救われたけれども、少しするとまた罪を犯して失敗した。もう私の人生は神に見捨てられているのだろうか？」「いいえ、そんなことはありません。」恵みの上にさらに恵みが来るのです。そうやって信仰者として成長してゆきます。私たちの信仰生活が恵みによって始まったのなら、恵みによって完成するのです。私たちは神の恵みによって赦され続ける罪びとなのです。赦されるたびに神の恵み、つまり神に愛されているということが分かるのです。

3. 恵みとまことによって生きる。

1:17に「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」とあります。律法というのは、紀元前1500年程の時にイスラエルの民がエジプトで奴隷生活をしていたところから解放されて、シナイ山のところで神の民となった時に与えられたものです。イスラエルが国民として、神を中心とした社会生活ができるように、また神の幕屋を通して神に近づくことができるようにしてくださいました。そこにはいろいろな掟と戒めが書かれています。それまでは、人々は、神がこのような小さく、無力な人間の細かい生活の中にどのように関わっているかを知りませんでした。けれども神はイスラエルを選ばれて、生活の細かいところにまで指示を与えてくださり、神はいったいどのような方であるかを身近に知ることができる特権に預かっていました。

ところが、それでも律法の下に生活するには問題がありました。それは、「その律法を守り行なうことができない」という問題です。イスラエルの民は、モーセを通して十戒が与えられてから40日もしないうちに、金の子牛を造って、乱痴気騒ぎをして神に背きました。旧約聖書を読めば、イスラエルの民が最後の最後まで律法を破り、そして神からの裁きを受けてしまっている、失敗の歴史ということが分かります。律法は、正しいけれどもその律法を守り行なう力が人にはない、という問題があるのです。ある意味、神の律法と戒めは救いに至る綿密な設計図のようなものと見る事が出来るでしょう。どんなに良い

設計図でもそのための部品、それを製作する人、そして最後動き出すための電気や燃料が無ければ意味を成しません。そのこととは対照的に福音書に、イエス様がツアラアト（重い皮膚病）を清める出来事が書かれています。イエス様は、人を癒されてから「祭司のところに見せに行きなさい」と言われました。なぜならその病が治った時には祭司に見せに行き、祭司が回復したことを宣言すると律法に記されているからです。しかしこれは癒しの力があって、初めて律法が意味を持つのです。誰も癒されていないのに祭司に宣言して初めて社会復帰できるといっても意味がありません。つまり律法それ自体にはいのちはないのです。こうも言えます。イエス様が真理、実体であり、律法に定められていることは影にしか過ぎないということです。ヨハネは、モーセの律法と対比して「恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」と言っています。「まこと」とは真理、いのち、不変のものということです。イエス様は、福音書の中でご自分のことを「わたしは真理です」と言われました。イエス・キリストによって実現したということはイエス・キリストご自身、恵みとまことに満ち溢れていたということであり、それはキリストにいのち、永遠のいのちがあるということです。私たちはこのイエス・キリストの恵みとまことによって成長してゆくのです。「恵み」とは本来、受ける資格の無い者に与えられるものです。それは、赦し、あるがまま受け入れてもらう、予期しなかったものが与えられるといったことと理解できます。例えば、キリストのまこと、つまり真実で聖い神の前に出る時に私たちは普通、自分の罪深い姿に直面します。しかし、同時にキリストの恵みによって罪赦され生かされていることに気づくのです。

「恵みとまこと」を分かりやすく人間の身体に例えるなら、まこととは真理、不変ですから背骨あるいは骨格に例えられます。一方、恵みは赦し、一方的に受けるものですから肉、筋肉と捉えることができます。一方に偏ると成長を損ねてしまうかもしれません。骨はがっちりとした固い背骨であったとしてもそこにそれなりに十分な肉が無いとからだとしてはアンバランスです。逆も同じです。肉は十分過ぎるぐらいありながらも骨が細く脆いとしっかりと立っていることは出来ません。これを人間関係や子育てに適用すると例えば子供が失敗したり、悪いことをした時に「お前は何も悪くない」といった対応をすると、つまり恵みどっぷりの対応ですね。その子がどうなるかと言うなら何でも責任転嫁して自分の人生に責任を取らない子になってしまうでしょう。そしてお母さんのしていることはその子の自立を遅らせていることになるのです。また今度は子供のミスや失敗ばかりを指摘するとそれは「まこと」のみで対応することとなります。確かに言われていることは真実なことなので当たっているのですが赦しということを感じるのが難しくなってしまう。私たちにはどちらも必要です。「恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」のです。実現したということは「恵みとまこと」の源なるいのちがイエス・キリストにはあるということです。

どうかまだイエス・キリストを信じていない方はあなたを救い出すために肉体を取って私たちのところに来てくださり、十字架に至る道を通ってくださった。それはただあなたを愛するが故であることを覚えてイエス・キリストを救い主として信じ受け入れてください。すでにクリスチャンの方にとっては信仰者の生涯は主のまことによって私たちの現実の姿、罪を示され、主の恵みによって赦される。これを繰り返しながら成長してゆくことを覚え、「恵みとまことを実現してくださった」主イエス・キリストに従ってまいりましょう。